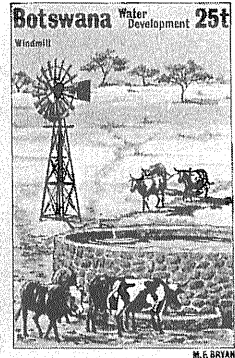
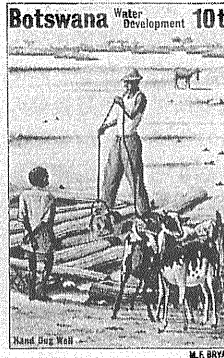
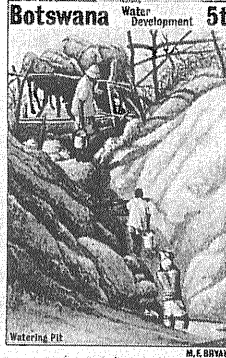
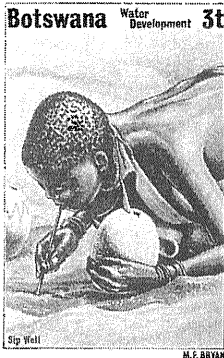


# カラハリ砂漠の水資源開発切手

P. Q.



カラハリ砂漠はアフリカ南西部にある砂漠で、先カンブリア界の基盤の上に、新生界のカラハリ砂層が薄く覆っている地質構造となっている。南緯12°から28°におよび、総面積は160万 km<sup>2</sup>である。特にその南部は年降水量150～400 mmの乾燥した部分で、ブッシュの卓越した半砂漠地域である。乾燥度の高い中部から南部にかけてはブッシュマンの生活空間となっており、またボツアナ共和国ともほぼ一致する。

ボツアナ共和国は昔のベチュアナランドで、イギリスの保護領だったが、1966年に独立してボツアナとなった。南アフリカの北、南西アフリカの東、そして北と東はアンゴラとジンバブエで限られる。1981年の人口は94万人である。国土の大部分はアカシア類のブッシュの卓越した半砂漠で、牧畜を主とした産業以外あまり知られていず、南アフリカに接しているだけに、ダイヤモンド、銅、ニッケルがわずかに産するにすぎない。それだけに水資源の開発が重要な課題となっている。

1979年に水資源開発と題して5種1組の切手が発行された。最高額40tは近代的水井戸であるが省略されている。むしろ風車を利用した汲み上げ(25t)、簡単な手掘り井戸(10t)、ピット掘り(5t)が背

後の砂漠の風景と共に興味をそそられる。

最後の3tはブッシュマンの少年が砂漠の中の地下水脈から管によって地下水を吸い上げているのを示している。

ブッシュマンは砂漠に住む狩猟民族で人口は約6万、男子の平均身長は約155 cmと低い。起源は謎に包まれているが、形態的にはモンゴロイドに似通った特質を持ち、血清遺伝学的にはネグロイドに近似しており、アフリカ大陸最古の住民であることは確かである。現在はカラハリ砂漠にのみ残存し、男の狩猟、女の植物採取によって生計を得ており、移動生活を行い、文明生活になじまないものとされている。

これについては「I met a Bushman」というテキストに出会ったことがある。カラハリ砂漠を車で横断しようとした私の車は、ラジエーターの水が無くなって停車したところ、夜が明けてブッシュマンの少年が水を持ってきてくれた。しかしわずかに足りなかったため、その分を付近の水脈から吸い上げてくれたという話である。原文はリーダーズダイジェスト1949年1月号だという。1カ所での水は僅かしかないらしい。そんな話を思い出させた切手である。